

「ネオリベラリズム時代には人権と社会連帯はどうなるのか？」

野口道彦

§1. はじめに

今、何が問題なのか。差別の扇動、ナショナリストの誘惑。ネオリベラリズムによる経済的不平等拡大。社会的連帯をつくりだすことが重要な課題。

§2. ネオリベラリズムとは何か

○ デヴィッド・ハーヴェイは、ネオリベラリズムを市場原理主義という理論と階級権力の再興としてとらえる。国際格差や階級格差を激化させ、世界システムを危機に陥れようとしていると批判

○ 小田亮（文化人類学者）

「ネオリベラリズムとは、グローバル資本主義における短期的でフレキシブルな資本蓄積のために、規制緩和や雇用形態のフレキシブル化といった政策によって流動性を促進させ、経済的不平等を拡大・再生産して階級権力を再構築し、その経済的不平等を自己実現と称揚と自己選択=自己責任からなる「個人化」のイデオロギーによって正当化する体制を指す」（小田亮、2009）

この定義は簡潔にして要を得ている。

- 1) 市場原理主義
- 2) 規制緩和 小さい政府（今、新型コロナウイルスの時代では、大きな政府になっている）
- 3) 雇用形態のフレキシブル化（労働力を安く買い叩く、雇用の不安定化）
- 4) 経済的不平等、社会的不平等の拡大
- 5) 「個人の自由」と「自己責任の強調」（負けたのは本人の責任、政策の失敗ではない。政府の責任ではない）

§3. ネオリベが生み出した危機的状況

- 1) ますます進む2極化、年収200万円以下が増加、一部の富裕層に富が集中。
ワーキングプア、貧困の問題
- 2) 雇用の流動化（a. 長期蓄積能力活用型、b. 高度専門知識活用型、c. 雇用柔軟型（日経連「雇用のポートフォリオ」1995））

§4. ネオリベラリズムは人権を破壊する

- 1) リバタリアニズムは、個人の自立の重視の点で、結婚差別からの解放の根拠となる利点をもつ。
- 2) しかし、他方では経済的不平等、社会的不平等の拡大し、社会的連帯を引き裂き、マイノリティに対する差別を生み出す。
- 3) ネオリベラリズム体制は、雇用の不安定化を促進する。
非正規労働の拡大
ギクワーカー（GIG Worker）の創出（自営業的形態、失業保険なし、保証なし
イギリス：ケンローチの映画、韓国「パラサイト、半地下の家族」、是枝裕和「万引き家族」

§5. ネオリベ型の人権論とは何か

1. 「自主独立」 (アイン・ランド)
2. 「個人の人権」を主張、「集団」の権利は否定。
3. 「個人の自由」と平等を対立的にとらえる。
4. 「機会の平等」にとどまり、「結果の不平等」は肯定
5. アファーマティブ・アクションを蛇蝎のごとく嫌う
6. 糾弾権の否定
7. 「自立」、「自己責任」の強調
8. 人権領域に市場化を導入

ネオリベ人権論は誰に支持されやすいのか？

§6. ニューレイシズム (new racism, symbolic racism)

民主主義の徹底が差別からの解放につながると素朴に信じてきた。しかし、new racism は、民主主義の理念であり賞賛されるべき価値とされてきた個人主義・平等主義が、逆に差別の取り組みに反対する論拠とされてきた。

- 1) 古い形の人種主義は、今日では人種政策や投票行動にはほとんど影響を与えていない。
- 2) 黒人についてのネガティブな感情やステレオタイプは保持されている。
- 3) 黒人は、アメリカの価値(勤労倫理、自立、自己抑制、権威への従順さといった価値)を侵していると考える。
- 4) 差別はもはや黒人の地位向上のさまたげとなっていないという考える。
- 5) 黒人は地位向上のために自分自身でもっと努力すべきであると考える。
- 6) 黒人は政府や他のエリートたちから特別な扱いを受けすぎていると考える。

これを批判せよ。

§7.ネオリベの人権施策は、どのような形で展開されているのか

- 1) 人権施策にも、市場化原理を導入。競い合い合わせることによるコストダウンをはかる。(例えば、隣保館の指定管理者制度)
- 2) 等質化された「市民」を語る。市民に対する「公平なサービス」を語る。
----すべての市民に開かれたサービスという美名
----力関係における資源の不平等が存在することを無視ないし軽視する
- 3) 機会の平等の重視、結果の不平等を「格差」とよび、自己責任だと正当化している論理。
- 4) 「評価」というモノサシを導入することによる一見公平に見えるが、基本的には不平等な「評価」を用いて、選別を行う。
----隣保館の利用状況という量により評価。
----相談した内容、質が表現されない評価基準、

§8. ナショナリズムからの解放

- 1) 日韓関係
- 2) 長生炭鉱に取り組む市民たち
- 3) 徴用工の問題は各地にある。

§9.ワールドカップ、南アフリカの優勝の意味

- 1) 反アパルトヘイトの闘いは、日本においてどうだったのか。
- 2) 投資引き上げ闘争

- 3) 日本は、なぜアパルトヘイトを黙認したのか？
- 4) 日本政府・企業の抜け駆けの意味は大きい
- 5) ANCや国際社会は日本をどのように批判したのか？
- 6) 日本での反アパルトヘイト運動、なにが総括できるか

§10. 大坂なおみのマスクによるBLM

- 1) Black Lives Matterの動き
- 2) 大坂なおみのマスクによる意志表示
- 3) 「スポーツに政治を持ち込むな」という誤謬

§11. ネオリベに対抗するために

- 1) 社会的連帯の重要性

小田亮は、ネオリベ体制の中で最も重大な問題は、「個人化」を徹底し、社会的連帯を破壊していったことにある」と指摘
- 2) 湯浅誠の「溜め」：お金の溜め（貯金などの）、人間関係の溜め（頼れる家族・親族・友人といった人間関係）、精神的な溜め（自分にはまだ自信がある）

お金の溜めがなければ、生活保護などのセーフティーネットが不可欠
- 3) 「流通や金融が生産の劣化を促すようになってしまったことに、現代資本主義の問題がある」（内山節、2009『怯えの時代』）
 - 「冷たいお金」を「温かいお金」に変える

「温かいお金」：人と人との関係のために使われるお金（頼母子講、孫のために何かを買ってあげるために貯めたお金）
 - お金で買えないものを大切に生き方が大事。貨幣価値とは異なる価値を付与する。
- 4) 社会的連帯経済

社会的疎外に苦しむ人々を社会の中に取り込んでゆこうという経済活動

例えば

 - NPO (Nonprofit Organization)
 - フェアトレード
 - 地域通貨
 - マイクロクレジット
 - 協同組合
 - ワーカーズ・コレクティブ
 - オープンソース（公益を目的として無料で利用）

§12. まとめ

- 1) ネオリベリズムが破壊したものは社会的連帯への希望的感性・価値観である
- 2) しかし、ネオリベリズムは永遠ではない
- 3) だが社会的連帯は再生不可能まで破壊つくさされているわけではない。人々の闘いのなかに、社会的連帯はしぶとく残っている。
- 4) 連帯は、闘いのなかで追求すべきもの

差別された人たちが、奪われてきたものを奪い返すときに連帯が必要
- 5) 分断支配に注意。マジョリティは、闘う姿勢をもったマイノリティを嫌う。

恩情的にマイノリティを支援する範囲内でなら共生に賛成する
- 6) 国境を超えた人民の連帯が不可欠

<参考文献>

- 野口道彦「反ネオリベラリズムと共生社会、社会的連帯をいかに再生させるか」『共生社会研究』No. 14・15合併号、p.2~10、2020.3.31
- 野口道彦「ネオリベラリズム、リベタリアニズムと結婚差別、地縁忌避」（世界人権問題研究センター編『問いとしての部落問題研究——近現代日本の忌避・排除・包摂』（人権問題研究叢書16）p.265-290 2018年
- 野口道彦「ネオリベラリズム時代の差別解消論」（『佐賀部落解放研究所紀要：部落史研究』33号、p. 2-23 2016年
- デヴィッド・ハーヴェイ『ネオリベラリズムとは何か』本橋哲也訳、2007、青土社
- デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義—その歴史的展開と現在』渡辺治監訳、2007、作品社
- 小田亮「「二重社会」という視点とネオリベラリズム」『文化人類学』74-2、2009
- 湯浅誠『反貧困 :--すべり台社会』からの脱出』2008、岩波新書